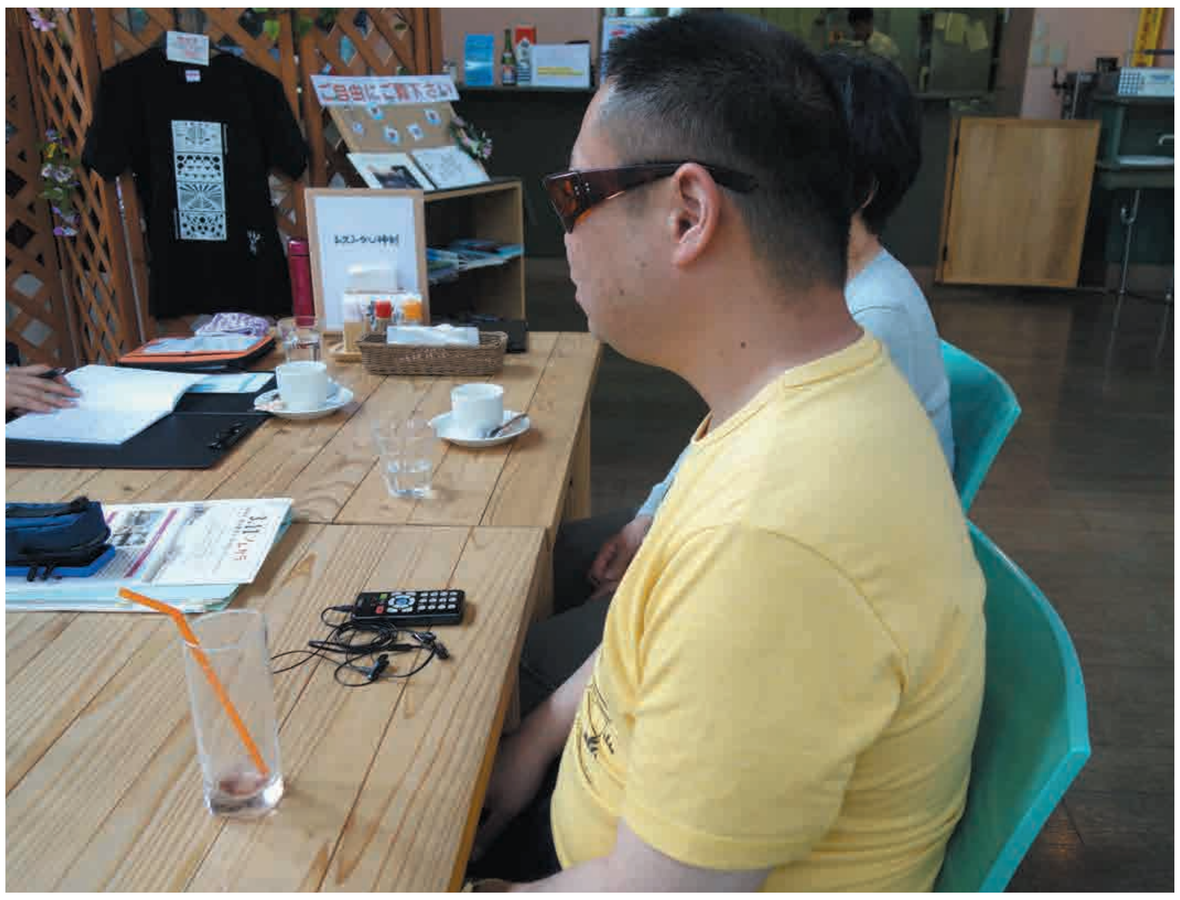
3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎小山賢一さん（男性／当時30代／盲ろう者［弱視難聴］）

「日常生活の当たり前」がない避難所。障害者ゆえの葛藤やプレッシャーを感じた。



― 小山さん ―

― 復興に向かいつつある相川地区 ―

トイレ　津波を直感し間一髪避難。避難先ではトイレが最大の困りごとに。

3月11日の午後、小山さんは石巻市にある自宅の離れの部屋で一人、テレビを観ていた時に大地震に見舞われました。建物が倒壊しそうなほど大きな揺れで身動きがとれず、揺れが少し収まったタイミングで庭へ脱出しました。

余震が続くなか、自宅のある地域がチリ地震津波の教訓から地震と津波のセットで避難訓練を実施していたこと、2日前の地震で1mの津波が湾に押し寄せたことから津波がくると直感し、高台へ避難しました。

間一髪の避難で命は助かったものの、津波によって地域は流され、高台は孤立し、ライフラインも寸断。避難所は周辺地域からの避難者で溢れていました。偶然発電機を積んで避難してきた工事業者の方から発電機を借りて、夜間は暖房を使ったり、避難所周辺の民家から山水や食料を分けてもらったりして、被災直後は皆の力を合わせて何とかしのぐことができました。

数日経って少しずつ自衛隊の支援が入り始めましたが、小山さんには困ったことがいくつかありました。そのひとつが、トイレです。断水で水洗トイレが自由に使えず、近所の畑を掘り津波で流れてきた畳を敷いた簡易トイレも、目が不自由な小山さんには危険が多く、一人では自由にトイレに行くことができませんでした。そのため、一緒に避難生活をしていた家族が外出する朝8時から夕方5時まで、ずっと我慢していた日もありました。しばらくしてから、高台に残った民家の屋外にある汲み取り式のトイレを借りられるようになり、それでだいぶ助かったといいます。

個室空間　常に見られているという心理的不自由。一人で落ち着ける個室が欲しかった。

小山さんは、避難所で一緒になった方々に、自身の目が不自由であることが知られていたことで、気配りやお手伝いしてもらったことに大変感謝しています。同時に、そうした周囲の気遣いに複雑な思いもあったと心苦しそうに話しています。「プライベート空間がなく常に見られている状態で、心理的自由がないというか。視覚障害者仲間も同じような思いをしたと後から聞きました。見えないから状況が分からない、かといって一人ではいられない。そのような状況でもトイレなどの個室では一人になれるため、落ち着くことができました。世話になる身なので皆さんの気配りは感謝の一言に尽きます。それとは別にプライベート空間は欲しかった。そのあたりの葛藤や複雑な思いはあります。」

食事　物を粗末に出来ない雰囲気の中、食事の量を調整できないことが辛かった。

また、日常生活では全く気にしたことがなかった「食べられる量を食べる」ということに関しても、複雑な思いを抱いたといいます。当時の被災地ではまだ物資や食料に余裕がある状況ではなく、自分にとって多すぎる食事の量であっても残すことができず、出されたものはがんばって食べた時期もあったと話しています。避難所で食糧支援を受けているという立場から、いただいたものを粗末にすることができないという気持ちが、時にプレッシャーに感じたこともあったそうです。

（2 枚目に続く）